

## 『伊勢物語』主人公像の造型に関する一考察：初段「昔男」の「垣間見」と「イメージ」をめぐって

著者	河地 修
著者別名	KAWAJI Osamu
雑誌名	文学論藻
巻	87
ページ	1-12
発行年	2013-02
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00012961/">http://id.nii.ac.jp/1060/00012961/</a>

# 『伊勢物語』 主人公像の造型に関する一考察

―初段「昔男」の「垣間見」と「イメージ」をめぐって―

河 地 修

## 一、主人公像の印象

言うまでもなく、『伊勢物語』の冒頭は「発端」としてある「初段」である。この章段の意味、もしくは意義については、過去考察を加えている（『伊勢物語の発端と主人公』『伊勢物語論集』所収）。すなわち、「初段」の、この物語の「冒頭」としての必然性の問題である。そのことは、たとえば、一九六四年に発表された渡辺実氏の、この物語の作品論的立場から言えばまさに記念碑的論文となった「伊勢物語の人物批評」（『国語国文』三三三卷・十号）にも早くから指摘されていた問題であった。

渡辺氏は、「初段」の読解に当たって、「うひかうぶり」「お

いづく」「いちはやきみやび」という言葉に注目した。すなわち、元服直後（初冠）の少年のような主人公（昔、男）が、偶然垣間見した「女はらから」に対して、求婚としてその場にふさわしい和歌をとっさに詠みかける行為を「おいづく」（実際の年齢以上に見える）と評価し、さらに、それを「いちはやきみやび」として賞賛するに至った物語、と読み解いたのであった。

「初段」は、確かに、渡辺氏が言うように、この物語の主人公像を、そのオープニングにおいて強烈に印象づけるものであった。この先の物語の展開に当たってのプロローグとしての役割を十分に果たしていると言っていいかもしれない。

すなわち、この先の物語展開への興味とともに、鮮烈なデ

ビューを飾った若き主人公の今後の活躍への期待が、多くの読者の心を捉えたのは想像に難くない。事実、その期待を意識するかのように、次章段の冒頭は、「昔、男ありけり。奈良の京は離れ、この京は」と、一見、主人公が、今度は「奈良の京」ではなく「この京（平安京）」で活躍するかのような口吻で始められるのである。むろん、この期待は、読み進めるとともに、見事に、そして確信的に裏切られることになるのだが、ともかく、「初段」が放つ主人公像は強烈なものがあつたと言つていい。

従来「初段」の注釈は問題が多い。これは、語彙としての問題もあるが、結局はそのテーマ（はなしの眼目）がよく理解されていなかったためではないかと思われる。その意味でも、繰り返すが、渡辺氏の「伊勢物語の人物批評」は画期的な論文であつた。元服間もない年若い主人公の行為への賞賛という観点で「初段」を読み解くなら、逆に難解とされている幾多の注釈上の問題も解決できるように思われる。

## 二、「うひかうぶり」という語について

言うまでもなく「初段」の冒頭は、漢字かな混じり文で表記すれば「昔、男、初冠して、」という表現で始まっている。この「初冠」は「うひかうぶり」だが、厳密に言えば、もとが漢字表記の「初冠」とあつたのか、それとも「うひかうぶり」とあつたものに、後世、書写の過程で「初冠」の表記を当てたのか、よくわからない。

前者だとすれば、「初冠」という漢語の由来や「うひかうぶり」という読みでいいのかということが問題となるが、後者だとすれば、「うひかうぶり」に「初冠」という漢語を当てるのが適当かどうかということが問題となる。ただ、いずれにしても、結局は、語彙としての「うひかうぶり」が問題となることは言うまでもない。

語彙としての「うひかうぶり」は、明らかに「うひ」と「かうぶり」の二語構成からなる。「うひ」とは「初」で、初めてということであるが、「この世に生まれてから初めて」というニュアンスに近い。このことから「初初しい」という類

語も派生したのであろう。また「かうぶり」は「冠」であり、サ変動詞の「す」を伴って、原義としては、「冠」を付ける、ということである。

貴族の子弟は、元服をすると冠を付けることから、「かうぶります」とは、元服するという意味でも用いられた。たとえば『日本国語大辞典』は、『宇津保物語』の「十二歳にてかうぶらしつ」という例を引いてる。この『宇津保物語』の例からすれば、「かうぶります」は、明らかに、元服する、という意味であり、『伊勢物語』初段の例は、この「かうぶります」に「うひ」が接頭辞的に付いたものと考えていい。

この場合の「うひ」とは「初」で、生まれて初めて、元服をし「冠」を付けた、ということを行っているのである。初々しい貴公子の誕生、といった印象が強烈である。当時の元服は、早いときはおよそ十二歳当時から行われているので、「うひかうぶります」からは、年少の若々しい貴公子像がイメージされるのである。この意味で、渡辺実氏の「元服直後の若々しい主人公の誕生」という読みは正しいとしなくてはならない。

この「うひかうぶります」という語彙については、別の要素から注目しておかなければならないことがある。

それは、今述べたように、この語が本来は「かうぶります」という形が基本であるということである。それは、『宇津保物語』の「十二歳にてかうぶらしつ」の例からも明らかである。初段の例は、その基本形の「かうぶります」に「うひ」が付いた、ということに過ぎないのだが、この形は、おそらくは『伊勢物語』が初出であって、同時代の他の文獻には見られない。

このことは別の意味で興味のある問題である。すなわち「うひかうぶります」という形は『伊勢物語』の作者が創始した可能性が高い、ということであって、ここには、ことばの創始、という問題が浮上してこよう。この問題は、実は『伊勢物語』では随所に出来してくることなのだが、とりあえず今は措く。「昔、男、初冠して」―元服直後の初々しい主人公の、しかしみごとに「みやび」ぶりを語るのが初段なのだが、しかし、「みやび」の語義の問題を含め、このあたりの事情について、私は、もう少し精緻に検討しなければならないと思っている。

### 三、「春日の里」を知る

「初段」―オープニングにおいて、颯爽と登場した主人公は、いったい何者なのか、本文を読む限りでは、実は、具体的データは何一つない。年少での「元服」ということ、「鷹狩」をするために旧都「奈良」の「春日の里」に來たということ、という設定に過ぎないのだが、このくだりについて、物語本文は次のように記している。

昔、男、初冠して、平城（なら）の京、春日の里に知るよしして狩に往にけり。

ここで見逃してはならないのは、主人公の「男」が「春日の里」を「知る」と言っていることであろう。「知る」とは、この場合、領有する、という意である。すなわち、この男、もしくは、男が所属するところの「家」は、奈良の「春日の里」を私有地として領有しているということになるのである。

「初段」の時代がいつ頃の話であるのか、精緻には断定する

### 四

ことはできないが、「平城京」を「ふるさと」（旧都）と呼んでいることや、次の「第二段」の時代設定が「平安京初期」である点に鑑みるならば、「初段」の時代設定も、「二段」と同時期であると考えるべきであろう。

この当時（平安京初期）、奈良の「春日の里」を領有することが許される氏族とさえ、当地の「春日大社」と「興福寺」を「氏神・氏寺」とする「藤原氏」以外には思い浮かべようがないであろう（当時は律令で言う「公地公民」の時代であり、一部の特権階級（親王家等）を除いて土地の私有は認められていなかった）。

その「春日」で、主人公は、「狩」―「鷹狩」を行うのである。「鷹狩」とは、遙か古代の中央アジアに発祥し、かの地の王がたしなむものであったことはよく知られている。やがて朝鮮半島を経て、我が国には、仁徳天皇時代にもたらされたと『日本書紀』は言う。それゆえ、觀念としては、古代の英雄―天皇にのみ許された「王権」を具現する行為の一つという性質を持つのである。

そういう人物として「初段」の男が登場し、さらに「春日

の里」を領有する、と語るのである。それらから導かれることは、主人公が「天皇家」の系譜に連なる人物であるということに加えて、「春日の里」（藤原）を支配領有する人物でもある、というイメージではないか。

もしも、この物語が誕生した時の最初の読者が「反藤原の世界」にいる人々であったとするならば、すなわち、そういう「家」で制作されたものであったとするならば、この主人公像はどう映ったのか、ということ想像するのもおもしろい。

『伊勢物語』は、「第三段」以降の「二条后物語」を読み進めていけばわかることではあるが、実は「反藤原」の姿勢を鮮明に示している。たとえば、「第六段」では、藤原基経、国経を「鬼」と表現していることや、「百一段」では「あやしき藤の花」にちなんで藤原氏への必要以上の追従姿勢を見せるのも、すべては、「反藤原」の精神から発している。しかし、当時の絶対権力機構であった「藤原氏」（北家）への反発の姿勢は、「物語」という「女性の文化」の枠組みの中であつたからこそ表出が可能であつた。「物語」という、まったく公的に

は問題にならぬ次元のエンターテイメント（言葉は悪いが、女子供のたわいのないものとして認識されていた）であつたからこそ、そこには、いわば何を語っても許されたのである。

『伊勢物語』とは、そういう「物語」の持つ自在性のもとで、その衣の下に鋭利な刃物を隠し持つような作品ではあつた。

ここには、「薬子の変」以降、すなわち藤原冬嗣以降、「藤原北家」に蹂躪し続けられてきた没落貴族の、「物語」という遊戯世界にのみ許された、「諸虐」にも似た反発の精神がある。

#### 四、「垣間見」直後の「求婚」をめぐる

言うまでもなく、恋物語には男女両主人公が登場する。その主人公は、他を圧倒する技量と資質とが付与されていなければならず、ありていに言えば、現実世界にはいない、理想的、かつ、ほとんど超人的「男」であり「女」でなければならなかった。そのうちの男性主人公が、折口信夫が言うところの「いろいろのみ」であつて、古代の神々の世界にしか存在しない英雄でもあつた。その典型的人物が、王朝物語文芸の世界に新しく蘇つた「光源氏」であることは言うまでもない。

『伊勢物語』「初段」の主人公も、実は、そういう主人公として登場している。しかも、元服したばかりの「初々しい」少年の主人公としての登場なのだが、この主人公像の造型について、もう少し精密に考えてみたいと思う。

この問題については、すでに別稿(『伊勢物語論集——成立論・作品論——竹林舎)でも論じているので参照されたいが、ここでは、男性主人公が「なまめいたる女はらから」を「垣間見」というところから物語が展開することに注目したいのである。

「いろごのみ」は「垣間見」をする。「いろごのみ」とは、むろん狭義の「色好み(とりわけ異性を好む人物)」でもあるから、彼は、当然「好色」であって、すなわち、女を「垣間見」するのである。「垣間見」とは、今言う「のぞき」であるから、それが物語の主人公にどう関わってくるのかということが問題となる。

繰り返すが、主人公は好色でもあるから、その結果、ただの「のぞき」もやるのである。しかし、こういった物語の主人公は、ただの「のぞき」では終わらないということになる。

初段の場合、「垣間見」の相手は「なまめいたる女はらから」である。この女性主人公の造型については、別に考察するが、今まず問題としたいのは、垣間見をした直後の男の行動についてである。

物語本文は次のように言う。

この男、垣間見てけり。おもほえず、ふるさとに、いとはしたなくてありければ、こちまどひにけり。男の着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、信夫摺の狩衣をなむ着たりける。

春日野の 若紫の 摺り衣 しんのぶの乱れ 限り知られず

となむ、おいつきて言ひやりける

「こちまどひにけり」とは、垣間見直後の男の心情であって、「まどふ」とは、ほとんど惑乱と言うに近い。その惑乱の原因として「ふるさとにいはしたなくてありければ」と語るのが、「ふるさと」＝「奈良」にはとても似つかわしくな

いヒロインであつた。そこで、ともかく、男は、「こちまどふ」という心情に陥るとともに、次の行動に走ることになる。

それはまず、「男の着たりける狩衣の裾」を「切」という尋常ならざる行為をした、とうことであつた。裾を切るといっても、反物をぎくぎくとハサミで切り取るというようなことではなく、狩衣の一部として縫いつけてある裾をはずし取るということであろうが、それにしても、縫いつけてある裾を取りはずし、それにうたを直接書き付けて相手に送るという行為は、けつして日常的な行為であらうはずがない。鷹狩であつたとしても、男性貴族なら、「懐紙」ぐらいは携帯しているはずで、なぜ「狩衣の裾」に書き付けなければならなかつたのか、ということが問われなくてはならないのである。

実は、その問いの解答は、男の詠じたうたの内容にあつた。それは、「春日野の若紫の摺り衣しのぶの乱れ」と続く「摺り衣」と「しのぶの乱れ」という語詞である。

この場合の「摺り衣」とは、男の着ている「信夫摺の狩衣」を指している。この「信夫摺」については、すでに江戸時代から正解が導かれており、すなわち、契沖『勢語臆断』に

「信夫ノ郡より、むかし摺りて出したる名物也」とあるように、陸奥「信夫郡」（現福島市にある信夫山付近）の名産の摺り物であつた。そして、その文様の特色については、古く「頭昭」の『古今集』の注に、「髪を乱したるやうに摺りたる」とあり、一言で言えば、「乱れ模様」というものであつた。

男は、自分の「こちまどひ」を「しのぶの乱れかぎり知られず」と詠み、かつ、それを、切り取つた乱れ模様の「信夫摺の狩衣」の上に書き付けたのだ。

おのれの心情を、とっさに五七五七七のうたに表出するだけでなく、それを「信夫摺」の「乱れ模様」として表象化してみせたところに、この「初冠」の主人公の、超人的スター性を読み取らねばならないのである。この男の一連の行動こそが、物語の末尾の解説「昔人はかくいちはやきみやびをなむしける」として称賛されることになった、と諸注は説くのである。

この男の行為であるが、男が自分の心情をとっさに歌に詠み、その心情にふさわしい「信夫摺りの乱れ模様」の「狩衣」に書き付けたのは、ずいぶん洗練された洒落た行為として評



価されるであろう。しかも、「初冠」の男なのである。元服直後の（ということは大になつたばかりの）男の行為としては、たしかに、優れたスター性を持ち併せていると言つていいだろう。

しかし、その前に、それらの前提となる男の行為そのものについて、少しく検証してみなくてはなるまい。そもそも「垣間見」とは思いがけない遭遇でもあるのだから、初段の男は、女との遭遇直後、求愛の行動に走つたことになる（その意味では「おひつきて」の解釈は、「老いつぐ」よりも「追ひつく」のほうがこの場面にはふさわしいように思われる）。むしろ、こういうストレートな求愛は、そのまま「求婚」ということにほかならない。実は、今、このことが問題となるのである。

物語というエンターテイメントの世界において、主人公の男が、垣間見直後にその相手に求婚することの是非を論じて何になる、という向きもあるかも知れない。しかし、古典といえども、現実の人間社会の構造から生まれている。古典に書かれていることを、少々無理があつても、あるいは無

理とも気付かず、昔の世界とはそういうものなのだ、というようなことで、それを当たり前のものとして読んでしまうこと、すなわち、古典の世界を特別の世界として受け入れてしまふところに、後代の読者の、ある意味では最大の陥穽があるのではないかとも思われる。なぜなら、古今東西、人間の文化の本質など、そう大きく変わるものではないからである。

つまり、この男の行為、すなわち、垣間見直後の求婚は、ごく常識的に考えれば、きわめて非常識な行為ではないか、ということなのである。垣間見をしたとしても、すなわち女に一目惚れをしたとしても、その後の求婚に至るまでのプロセスは、当たり前のことだが、それなりの手続きというものが必要となる。

##### 五、「若紫」巻の場合

たとえば、この『伊勢物語』「初段」を下敷きにして制作された『源氏物語』「若紫」巻をみてみよう。

今問題とすべきは「北山」の場面である。「十ばかりにやあ

らむ」少女を垣間見した後、光源氏は、きわめて迅速な行動

を取っている。偶然が重なった結果ではあるが、垣間見の後、少女の滞在する「僧都の坊」に招かれることとなって、少女の素性（藤壺の姪）を知った源氏は、少女の祖母（尼君）の兄である僧都に「をさなき御後見におほすべく聞こえたまひてむや」と、尼君への取り次ぎを請い、求婚の意志をもらすのである。

この場合、光源氏の行動は、ある意味ではきちんとしている。すなわち、垣間見した少女の美しさに涙を流しながらも、そのまますぐに求愛するという行動は取らなかった。いったん宿所に戻り、あらためてその坊に招かれたところで少女の素性を知り、ともかく、手続きとしては、僧都に対して、尼君への仲介を願うのである。だから、そういうところでは、伊勢の「初段」の男とは違う、と言えなくもない。しかし、源氏は、その夜、ついに気持ちを抑えることができず、和歌を詠み入れた。

初草の 若葉のうへを 見つるより 旅寝の袖も 露ぞ

かわかぬ

歌意は明快である。少女を見てからというものは、恋しさに涙が止まらない、というもので、明らかに求愛であり、僧都への申し入れからも明らかのように、これは、求婚なのである。

つまり、きちんとしているとは言っても、結局はその日のうちに求婚したという行為は、伊勢の主人公と比較して、五十歩百歩、と言えなくもない。

その光源氏の求婚に対して、むろん、保護者である祖母の尼君は断った。当たり前であろう。まだ幼い紫の上である。それゆえ、結婚には適さないことを述べるのだが、しかし、それと同時に、光源氏の強引さ（非常識と言っている）にも呆れていよう。とうてい源氏の求婚は受け入れられるはずもなく、紫の上を二条院に引き取るには、保護者である祖母、尼君の死去を待たなければならなかったのである。

源氏の求婚は、確かに強引ではあったが、しかし、それなりの必然性はあったと考えるべきであろう。それは、偶然に

も少女のいる坊に招待され、そこで一夜を明かすことになった、という設定である。昼間偶然垣間見をした当の少女と同じ屋根の下で休んでいる、そう考えるだけで、源氏の心中は平常心を失ったに違いない。そういう必然性の中での、源氏の求婚、と考えるべきなのである。

作者としては、物語世界を、なんとかリアリティーの世界に踏み留めた、とは言えるのではないか。源氏の行為は、許されるぎりぎりの「非常識」と言ってもいい。物語的設定という観点からすれば、作者は、なんとか手を打ったのである。しかし、許されるにしろ、許されないにしろ、あるいは、程度の差こそあれ、源氏の行為は、現実の社会においては、やはり「非常識」な行為とは言えるであろう。

貴族社会における結婚は、当然のことながら、そこには「家」が関わってくる。「家」としての「意志」を無視した結婚の申し入れなど、事情はどうであれ、無礼を通り越した「非常識」であった。だからこそ、作者は、その後の展開において、そういう「非常識」がやむを得ないことなのだ、という状況を丁寧に作り上げていくのである。

今、源氏の「若紫」の物語は措くことにしよう。伊勢の「初段」の男の場合はどうか。作者はこの「非常識」について、どのように物語的に処理しているのであろうか。あるいは、していないのか、という問いかけも求められるのではないか。

なぜ、この物語の主人公には、こういった非常識な行為が許されるのか。それは、かれらの人物造型には、古代の英雄像が重ね合わされているからではないかと思われる。

伊勢の主人公（光源氏も同じだが）は、古代の英雄（いろいろの）の再生というモチーフのもとで、その人物造型がなされている、と見るべきであろう。

## 六、重ねられるイメージ

かつて述べたことではあるが（『伊勢物語の発端と主人公』―『源氏物語論集』所収）、『伊勢物語』「初段」の主人公のイメージの基底に、『萬葉集』巻頭の雄略天皇の御製がある。

籠もよ み籠持ち ふくしもよ みぶくし持ち この岡

に 葉摘ます子 家告らせ名告らさね そらみつ 大和  
の国は おしなべて 我れこそ居れ しきなべて 我こ  
そ居れ 我れこそば 告らめ 家をも名をも

この場合、詠者とされる雄略は、岡に登って娘と出逢い、直後すぐに、「家告らせ 名告らさね」と求婚する。そして、その突然の求婚の根拠として、「そらみつ 大和の国は おしなべて 我れこそ居れ」と、自分が「大和の国」の王者であることを宣言するのである。まさに、古代の「天皇」たるものの王権の誇示としての役割が、この「うた」にはある。まさに、萬葉巻頭にこの「うた」を置くことによつて、古代の「天皇」の「王者」としての特性を宣言して見せたのであった。そして、この「王者」こそ、折口信夫が言う「いろいろのみに他ならなかった。

古代の英雄（天皇）に許されたものが「いろいろのみ」であり、かつ、そのことが理想とされた時代があったことを述べるのであるが、そういう意識のいまだ残像として残る時代に制作された物語が『伊勢物語』であつたと言うことが出来る。

「初段」の主人公の行為に古代の英雄（天皇）のイメージを重ねあわせ、物語世界に、超人的ヒーローを登場させたのだが、その基底には、もう一つ、明確な方向性があつたと考えられる。それは、雄略のイメージからも解ることだが、「天皇」ということではなかつたか。「初段」の主人公は、「天皇」、もしくは、「天皇の資質」を持つ人物として登場している、と見なくてはならない。それは、初段後半の、いわゆる「解説的注記文」のなかでも明らかになっている。

ついでおもしろきことともや思ひけむ、

みちのくの しのぶもぢずり 誰ゆゑに 乱れそめ  
にし われならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

このくだりは、過去に、それが後人注であるというような誤った解釈がなされたこともあつて、十分に検討されなかつたように思われるが、あきらかに物語の正文である。物語の

本文である以上、なぜこのような解説が必要とされたのか、という問い掛けが必要であつた。

それは、この「初段」に通底する「天皇」に関わるイメージの問題ではなかつたか。春日の里を領有する家、すなわち藤原氏をもしのぐ家の若者を登場させ、その土地で「鷹狩」を行う人物。そして、美しい姉妹（いとなまめいたる女はらから）に対して垣間見直後に同時に求婚する（姉妹婚）ことで、古代の英雄雄略を彷彿とさせた作者は、ここにおいて、九世紀のの左大臣、源融の歌を引用するのである。

「初段」の男の歌「春日野の若紫の摺り衣しのぶの乱れ限り知られず」は、源融の歌「みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにしわれならなくに」（『古今集』巻一四、恋四、四句目に異同がある）の歌を踏まえたもので、それと変わらないうのである。ここには、明らかに、源融への顧慮、あるいは、その人物のイメージの覚醒がある。

そして、融の生涯で注目すべきは、八七二（貞観十四）年に左大臣に昇つた後、その死の年（八九五）までその任であり続けたということもあるが、後世の『大鏡』が伝えるよう

に、陽成天皇讓位後の皇位継承問題において、自らが天皇となるべき正当性を主張したとされる点である。それが史実であつたのかどうか、というようなことは問題ではない。臣下に降りながらも、天皇となる資質を有するという点において彼は、伊勢「初段」の「男」のイメージ（光源氏も同様である）と変わらない。

また、源融は、六条賀茂川のほとりに豪壮な邸宅「河原院」を構えたことでも知られるが（伊勢八一段）、河原院の特性は、規模の大きさというよりも、「みちのく」の「塩釜」の景を再生、取り込んだことで注目されたのである。

伊勢の「初段」は、その主人公像に繋がるものとして、天皇の資質を持ちながらも天皇となることがなかつた「源融」のイメージを重ねながら、その人物像の造型を行ったと言ふべきであろう。

そして、そのイメージの明確な宣言とも言ふべきものが、「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」という最後の一文であつた。当然、この「いちはやきみやび」についての厳密な考察がなされねばならないだろう。別稿に譲りたい。